

## 機械の身体 ―― 美学は人工知能をどう語るのか

京都芸術大学 吉岡 洋

生成系人工知能は私たちの知的な活動、とりわけ創造的活動にとって根本的な危機をもたらす可能性がある、と、警鐘を鳴らす人々がいる。人工知能の開発者自身の中にそうした発言をする人がいるため、私たちの多くは翻弄される。たしかに人工知能が学術研究や作品制作の現場において日々刻々、身近な問題と感じられてきたことは否定できない。例えばこの発表要旨文自体、ChatGPTによって出力されたものではないと、いったい誰が確信をもって断言できるだろうか？

この発表に美学研究における何らかの意義があるとすれば、それは、テクノロジーが可能にする人工的な情報処理マシンを人類に対する「挑戦」や「危機」とみなすという思考様式の根底に、何世紀にも及ぶ、ある根深い形而上学的信念が存在することを示す、という点にあるだろう。この信念は「フランケンシュタイン・コンプレックス」と呼ばれてきた心的機制と密接に関係している。このことを知るのはきわめて重要であり、美学が人工知能に関して何を語るにせよ、そうした認識を基にすべきであると私は考える。

人工知能の美学を思想史を参照しつつ議論するために、私はまずヒューバート・ドレイファスが1972年に発表した『コンピュータには何ができないか』を批判的に検討する。その時代に想定されていた人工知能は、たしかに現代私たちを取り巻くそれとはかけ離れたものだった。だから彼の議論自体がもはや時代遅れだと考える人がいても無理はない。それに対して、ドレイファスの議論を現代の人工知能に合わせてアップデートすることが本発表の趣旨ではない。むしろ逆であって、人工知能が私たちに突きつける問題を、ドレイファスが依拠していたハイデガー、キルケゴールの思想へと遡行し、最終的にはカント『判断力批判』まで到達して、そこに現代的な問題を再文脈化することを試みたい。

世の中では人工知能に「何ができるか」ということだけがもっぱら前景化され、これまで機械には不可能とされていた何らかの知的・創造的作業が今や「できる」ようになった、といったことばかりがニュースになる。こうした状況の根底にも、機械と人間を競合するライバル同士のように考える、ある奇妙な形而上学信念がある。マスメディアが好むこうした大騒ぎは、学術研究や文化政策にも影響を及ぼしているので、無視できない深刻な問題である。本発表の趣旨は、こうした考え方自体が大いなる錯覚に基づくものであるのではないかと問いかけることにある。